

特集 1

市民参加のコミュニケーション： アートの心をどう伝えるか

Citizen Participated Communication: How to Communicate the Heart of Art

阿部恵子¹⁾、後藤道子²⁾
Keiko Abe¹⁾, Michiko Goto²⁾

1) 金城学院大学看護学部看護学科基礎看護学

2) 三重大学大学院医学系研究科家庭医療学講座/医学部総合診療部

1) Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kinjo Gakuin University

2) Department of Family medicine/General Medicine, Mie University Graduate School of Medicine

本特集では、第 14 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会のシンポジウム 1 「市民参加のコミュニケーション：アートの心をどう伝えるか」における 3 名のご講演をもとに、各講演の演者による総説を掲載します。アート・芸術を通して、学習者の感性、感情に働きかけ、多様な価値観を涵養する教育が、現在注目され始めています。そのような中、先進的にアートを元に感性を高める教育に取り組んでいる 3 名の先生に、芸術鑑賞、模擬患者、患者講師を活用するという視点で考察しています。

まず初めに、鳥取大学の孫大輔先生が、「アートとは何か？」を問い、多面的に芸術と社会の関係性を概説した上で、医療教育におけるアートの活用意義とその実践例を紹介しつつ、「正解のない」不確実性への寛容について考察されています。次に、名古屋大学の末松三奈先生は、多職種連携教育でパーキンソン病や認知症の患者及び家族の「病いの語り」を行う教育実践例をもとに、振り返りにおける学習者の思考過程に焦点を当て、学生の気づきや学びをまとめられています。3 人目は、東京大学の香川由美先生が、共感、変容的学習、ナラティブ理論を元に、効果的なストーリーテリングの具体的な方略を紹介し、学修者の価値観が揺るがされる体験のプロセスを考察されています。

これら 3 名の総説を通して、患者の価値観やアートに触れ、内省と思考する事による情動的な心の揺さぶりから真の共感や感性が生まれることが理解できます。本総説が、アートを元にした教育が広がるきっかけになれば幸いです。